若渓

特集

- 魅力ある大学づくりを
- はばたく若者たち

グラビア … 01
特集Ⅰ　魅力ある大学づくりを … 02〜03
筑波大学新執行部の陣容 … 04
第24回教職受験対策研修会から … 05
平成20年度　筑波大学芸術賞　茗渓会賞決る … 05
特集Ⅱ　はばたく若者たち … 06〜07
第13回茗渓・筑波グランドフェスティバル … 08〜09
茗渓会の公開講座から … 10〜13
平成21年度　茗渓会公益事業計画（案） … 14
第8回「顕彰」候補者の推薦依頼について … 15
通常総会開催のご案内 … 15
茗渓ソフトテニス百二十周年を祝って … 16
茗渓学園だより … 17
桐の葉のつどい … 18〜19
著書紹介 … 19
季刊誌「茗渓」などを確実にお届けしたい … 20
追悼録 … 21
本部だより … 22
編集後記 … 22

meikei
春
2009
No.1061

表紙デザイン：西川潔（筑波大学芸術学系教授）

国立大学法人 筑波大学　新執行部陣容

理事・副学長
田中　敏氏

理事・副学長
塩尻和子氏

理事・副学長
赤平昌文氏

理事・副学長
清水一彦氏

関連2～4ページ参照

学　長
山田　信博氏

副学長
西川　潔氏

副学長
宇川　彰氏

理事
岸　輝雄氏

理事・附属学校
教育局教育長
阿部生雄氏

理事・附属病院長
五十嵐徹也氏

理事・副学長
鈴木久敏氏

外部講師

蛭田　政弘氏

飯田　國雄氏

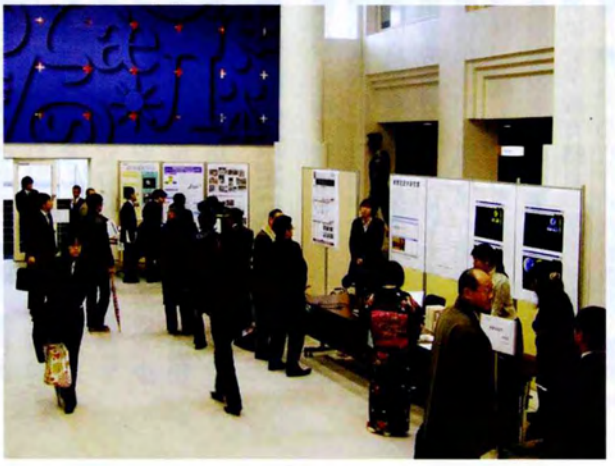
第24回教職受験対策研修会

筑波研修センター

研修会場

第13回 茗渓・筑波グランドフェスティバル

関連8～9ページ参照



関連5ページ参照

魅力ある大学づくりを

国立大学法人　筑波大学学長

山田信博

はじめに

私の専門領域の紹介も兼ねて、自己紹介をします。

臨床医学系内科（内分泌代謝）教授として１９９９年に筑波に赴任してまいりました。本年5月で10年在籍したことになります。一昨年より理事・病院長として筑波大学附属病院の運営を任されておりました。幸いにも、病院の再開発をスタートさせることができましたが、わが国の医療事情の厳しさを実感する毎日でした。内科医としては糖尿病や高脂血症などの生活習慣病を中心とする内分泌代謝を専門領域としています。昨今マスコミをにぎわしているメタボリックシンドローム（通称メタボ）も私の専門領域の一つになります。メタボの人からは糖尿病や心筋梗塞を起こしやすいということで関心を呼んでいますが、メタボをおこす原因は贅沢な食生活と運動不足になりがちな便利な生活習慣によるところが大きいことから、このような生活習慣をいかに改善するかが課題となっています。

この健康の危機は、ちょうど便利な生活の追求の結果として、化石燃料の過剰な消費に基づくCO_2の増加による地球環境の破壊の危機と類似しています。地球環境を守るために、人類の生存を賭けてCO_2の削減が世界中で叫ばれていますが、これは私たちに便利な生活をこのまま続けていいはずがないこと、知恵を絞って私たちの社会が工夫しなければならないことを示しています。健康も同様だということを肝に銘じております。このメタボというものが学術の世界においてそれほどまだ認知されていなかった時代から、この病気に注目して研究しておりましたので、最近のメタボブームやマスコミの取り上げ方には隔世の感を抱いております。私どもはこの病態を栄養・エネルギー代謝に関する遺伝子の発現の異常と捉えて、その異常に関連する特異的な分子の単離同定をおこない、病気の治療に結び付けたいと考えています。

山田　信博（やまだ　のぶひろ）

【前　　職】	理事・附属病院長	
【専門分野】	内科学	
【研究テーマ】	動脈硬化症の病態生理、糖尿病、高脂血症	
【学　　歴】	1976年	東京大学医学部医学科卒業
【学　　位】	1982年	医学博士　東京大学
【職　　歴】	1986年	東京大学医学部附属病院助手
	1994年	東京大学医学部講師
	1995年	東京大学医学部助教授
	1997年	東京大学大学院医学系研究科助教授
	1999年	筑波大学臨床医学系教授
	2001年	筑波大学人間総合科学研究科 先端応用医学専攻長（～2003年）
	2003年	筑波大学附属病院副病院長（～2007年）
	2004年	筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
	2007年	筑波大学理事・附属病院長

筑波大学の歴史の二つの側面

筑波大学の歴史には二つの側面があるように思います。一つはいうまでもなく、師範学校、高等師範学校、東京教育大学以来の135年を超える歴史を持つ伝統校であるという点です。１９６６年には朝永振一郎先生がノーベル物理学賞を受賞しています。もう1つは、従来校とは異なり、日本が豊かな時代になってから、新しい総合大学として生まれ変わったという側面です。私たちの先輩たちが大学に対する新しい考え方を取り入れて、多くの期待や夢をこめて、東京教育大学から筑波大学へと発展し、１９７３年に東京から筑波へ移転しました。２０００年には白川英樹先生がノーベル化学賞を受賞しています。２００２年に図書館情報大学が加わり、２００４年には法人化されて現在の国立大学法人筑波大学に至っています。東京教育大学から筑波大学に改組される際、新しい総合大学を目指して、多くの新しい試みがなされたと伺っています。私どももこの新しい考え方を継承するのみならず、更に改革を進め、教育研究の質の向上を図っていく必要があります。大きな改革を成し遂げた後は、少しリラックスすることが大事ですが、法人化された現状では前向きに改革を進める必要を感じています。

次期中期目標及び計画の策定に際して

現在、次期中期目標及び計画を策定中ですが、策定に際しては、とくに大学の基本的な目標や使命を、中央教育審議会答申「わが国の高等教育の将来像」に掲げる大学の機能別分化に関する考え方を参考にしつつ、自らの特性も踏まえ一層の個性化を図る観点から記載することが求められています。

この機能別分化では以下の7つのカテゴリーが挙げられています。①世界的研究・教育拠点、②高度専門職業人養成、③幅広い職業人養成、④総合的教養教育、⑤特

定の専門的分野（芸術、体育等）の教育・研究、⑥地域の生涯学習機会の拠点、⑦社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）。

次期中期目標の前文として現在、次のような方針を検討しています。

筑波大学は、あらゆる面で「開かれた大学」となることを目指し、固定観念に捉われない「柔軟な教育研究組織」と次代の求める「新しい大学の仕組み」を率先して実現することを基本理念とし、我が国における大学改革を先導する役割を担っています。

人類社会の調和の取れた発展の鍵を担う知の拠点として、大学にさらに大きな社会的役割が求められるなか、筑波大学は、知の全ての分野において幅広い教育研究活動を展開することが可能な総合大学として、個性と自立を基軸とし、世界が直面する問題の解決に主体的に貢献する人材の創出を目指した教育研究を充実・強化すべく、以下の目標を掲げる。

1. 自然と人間、社会と文化に係る幅広い学問分野において、深い専門性を追求すると同時に、既存の学問分野を越えた協同を必要とする領域の開拓に積極的に取り組み、国際的に卓越した研究を実現する。
2. 高度で先進的な研究に裏打ちされた学士課程から博士課程までの教育を通じて学生の個性と能力を開花させ、豊かな人間性と創造的な知力を蓄え、自立して国際的に活躍できる人材を育成する。
3. 科学技術研究機関が集積する筑波研究学園都市の中核として、教育研究諸機関および産業界との連携に積極的に取り組み、自らの教育研究機能の充実・強化を図るとともに、広く社会の発展に貢献する。
4. アジアをはじめ世界の国々や地域に開かれた大学として、国際的通用性のある教育研究活動の展開と連携交流に積極的に取り組み、国際的な信頼性と発信力を有する大学を実現する。
5. 教員と職員のそれぞれが個性と多様な能力を発揮しつつ協働することにより、次代における大学のあり方を追求し、新しい仕組みを実現するための大学改革を先導する。

めまぐるしい変化の中で

今、人類は思っている以上にめまぐるしい変化の中にいると危惧しています。一つは地球規模の変化です。温暖化により地球環境は破壊され始めていますし、IT革命により情報は瞬時に世界中に伝わっていきます。最近の100年に1度といわれる金融危機が世界中にあっという間に広がったことからも、その変化の大きさと速さを理解できます。このような文明の進歩によりもたらされた問題に対して、私たちは対立を越えて迅速に答えを出していかなければいけません。二つ目の大きな変化はわが国をはじめとする先進国における少子化と高齢化で象徴される世代構成の変化です。とくに、少子化した社会への対応はまだまだ整備されていません。

このグローバル化という社会の急速な変化の中で、大学も法人化により自律的運営を求められ、競争的環境への対応を迫られています。教育研究環境も含めて、社会全体のパラダイムシフトが起こっている状況であり、知の拠点として国立大学の役割は益々大きくなっているように思います。大学は、人類社会の未来に資する知を生み出すとともに、社会を支える人材を育てあげていく必要があります。より良い大学環境を整備するために、教育への一層の投資を要請するとともに、本学も着実に変化し、前向きに歩んでいきたいと考えています。

茗渓会は同窓生の集う大事な拠点

筑波大学草創期の卒業生は私より少し若い50台前半の世代になっています。社会においては、最も活躍を期待されている中核の世代ということになります。そして、続々と卒業生が社会のリーダーとして活躍していますし、次世代を育てる立場にもなりつつあります。さらに10年後には全ての年代層で同窓生が活躍する時代になり、筑波大学の真価が益々発揮される時代が到来すると期待しています。このような時代を近い将来に迎えるからこそ、大学と同窓生、同窓会がしっかりと交流し、連携し、支援する体制を整備する必要があります。現状では、同窓生の茗渓会入会は半数以下ですが、同窓生にとっても同窓会である茗渓会は皆さんが集う大事な拠点となりますので、その真価はこれから発揮されると確信しています。

是非、卒業生には茗渓会を通じて本学への支援のみならず、互いの交流を活発にし、若い同窓生を応援していただきますようにお願いします。そして、若い筑波大学が継続的に発展するための精神的支柱となるような、分かりやすい筑波イメージを示すことができるように工夫したいと考えています。同窓の皆さんからもアイデアを頂きたいと思っています。

つくばダイアモンドは

つくばダイアモンドはそうしたアイデアの一つとして、大学の法人化を契機に、筑波大学が大切にしようとしていることを表現したものです。このダイアモンドの6つの頂点は、Creativity：クリエイティビティー（創造的であること）、Integrity：インテグリティー（誠実で期待を裏切らないこと）、Friendliness：フレンドリネス（親しみやすく親切なこと）、Strength：ストレングス（肉体的・精神的に強く持続力があること）、Enthusiasm：エンシュージアズム（情熱にあふれ集中力が高いこと）、Intelligence：インテリジェンス（知性に富み体系的な知識をもつこと）であり、この6つの個性をダイアモンドの結晶のようにバランスよく発達させ、決して何ものにも屈することなく、いつまでも輝き続ける筑波大学及び筑波大学人のあるべき姿勢を象徴しています。私は筑波大学の校風は自由で、のびのびとしていて、権威主義的ではないと感じています。常に新しいことに関心を持ち、改革及び開拓していくフロンティア精神を尊重したいと思います。

研究と教育の改革には、組織改革も必要ですが、改革の根幹は意識改革であることはいうまでもありません。すべての学生と教職員が筑波大学人としての誇りと使命を共有し、国際競争力のある拠点大学の形成を目指し、「友情」と「尊敬」の念をもって協同し、魅力ある大学づくりを活発に推進していきたいと考えています。

茗渓会の皆様には今後とも本学へのご支援をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

国立大学法人筑波大学の新執行部が発足しました。

学長　山田　信博
理事兼副学長：教育担当　清水　一彦
〃：研究担当　赤平　昌文
〃：国際担当　塩尻　和子
〃：財務・施設担当　田中　敏
〃：総務・人事担当　鈴木　久敏
理事兼附属病院長　五十嵐徹也
〃　兼附属学校教育局教育長　阿部　生雄
〃（非常勤）　岸　輝雄
副学長：企画評価・情報担当　宇川　彰
〃：学生担当　西川　潔

理事兼副学長（教育担当）
清水　一彦（しみず　かずひこ）

【前　職】人間総合科学研究科長
【専門分野】教育制度学
【学　歴】1980年　筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位取得退学
【学　位】1997年　博士（教育学）筑波大学

理事兼副学長（研究担当）
赤平　昌文（あかひら　まさふみ）

【前　職】数理物質科学研究科長
【専門分野】数理統計学
【学　歴】1971年　早稲田大学大学院理工学研究科（数学専攻）修士課程修了
【学　位】1977年　理学博士　早稲田大学

理事兼副学長（国際担当）
塩尻　和子（しおじり　かずこ）

【前　職】特任教授
【専門分野】宗教学、比較宗教学、イスラーム思想、中東地域事情
【学　歴】1989年　東京大学人文科学研究科（宗教学宗教史学専攻）博士課程単位取得退学
【学　位】1998年　博士（文学）東京大学

理事兼副学長（財務・施設担当）
田中　敏（たなか　さとし）

【前　職】理事兼副学長（財務・施設担当）
【学　歴】1980年　東京大学大学院理学系研究科生物化学専門課程修了

理事兼副学長（総務・人事担当）
鈴木　久敏（すずき　ひさとし）

【前　職】ビジネス科学研究科教授・大学研究センター長
【学　歴】1976年　東京工業大学大学院経営工学専攻博士課程単位取得退学
【学　位】1988年　工学博士　東京工業大学

理事兼附属病院長
五十嵐　徹也（いがらし　てつや）

【前　職】人間総合科学研究科教授・附属病院副病院長
【専門分野】内分泌代謝学
【学　歴】1973年　東京大学医学部医学科卒業

理事兼附属学校教育局教育長
阿部　生雄（あべ　いくお）

【前　職】人間総合科学研究科教授（体育科学専攻）
【専門分野】イギリス体育・スポーツ史、比較スポーツ史
【学　歴】1972年　東京教育大学大学院教育学研究科博士前期課程修了
【学　位】2001年　博士（教育学）筑波大学

理事（非常勤）
岸　輝雄（きし　てるお）

【前　職】理事（非常勤）・（独）物質・材料研究機構理事長
【専門分野】材料、破壊・非破壊評価
【学　歴】1969年　東京大学工学系大学院博士課程修了
【学　位】工学博士

副学長（企画評価・情報担当）
宇川　彰（うかわ　あきら）

【前　職】数理物質科学研究科教授・学長特別補佐
【専門分野】素粒子物理学（理論）
【学　歴】1976年　東京大学大学院理学系研究科博士課程単位取得退学
【学　位】1977年　理学博士　東京大学

副学長（学生担当）
西川　潔（にしかわ　きよし）

【前　職】人間総合科学研究科教授・芸術専門学群長
【専門分野】視覚伝達デザイン
【学　歴】1971年　東京教育大学大学院教育学研究科修士課程修了
【学　位】1971年　美術学修士　東京教育大学
1997年　博士（デザイン学）筑波大学

第二十四回
教職受験対策研修会から

本会と財団法人筑波学都資金財団が主催する「教職受験対策研修会」が三月九日から十一日までの三日間「筑波研修センター」で開催された。参加者は定員五十名のところ希望者が多く、昨年の五十六人を六名上回る六十二名であった。研修内容は次のようなものであった。

[第一日]

＊開講式には筑波大学キャリア支援室長渡辺三枝子先生、茗渓会筑波大学支部長柳本雄次先生（49院博特教）筑波大学学生部就職課長高野澤勝美先生のご出席を賜り、田中正造事務局長（36健）も加わって、励ましの言葉や、いかに全国の教育関係者が筑波大学の卒業生に期待しているか等の話しをされた。

＊講義Ⅰ「教員採用試験の分析と対応」

蛭田政弘氏（42哲学）から教員採用の動向と対策として、各県で求める教員像などの話しが、教育改革と教員採用として、主に学習指導要領改訂の話しがなされた。

＊採用試験合格者体験発表（昨年度の研修会に参加して今年度の教員採用試験に合格した先輩）

①北海道　中学校（理科）
乾　大樹さん（大学院数理物質科学研究科）

②島根県　高等学校（英語）
中村裕佳子さん（大学院教育研究科）

③私立東洋大学付属牛久高等学校（公民）
大窪望佐子さん（大学院教育研究科）

＊論作文作成および面接について　事務局の高原　將が要点を説明した。

＊論文作成　90分で作成。

[第二日]

＊講義Ⅱ「我が国の教育の今日的な課題」

飯田國雄氏（42修東史）から教育基本法と教育三法の改正・学習指導要領の改訂・生徒指導上の諸問題・教育振興基本計画・学校評価などについて話しがなされた。

＊個人面接　学生宿舎所長の高野大二郎氏（40体）研修センター所長の染谷信洋氏（43言語）茗渓会事務局の重政文三郎（40教）と高原が面接官となり実施した。

体験発表の三人に加えて、阿部真隆さん（修士課程教育研究科　愛媛　高校　地理歴史）倉田健司さん（大学院数理物質科学研究科　茨城　高校　数学）山下真実さん（比較文化　広島　高校　日本史）大塚祐一さん（工学システム　茨城　高校　数学）の四人がチューターとして加わり、合計七人が受講生に個人面接の答え方等をアドバイスした。

＊集団面接と集団討論の実演

七人のチューターに、このあと実施する集団面接と、明日実施する集団討論の実演を行ってもらった。

＊集団面接

受講生数人のグループに対して面接を実施した。ここでも七人のチューターにアドバイスしてもらった。

[第三日]

＊集団討論　数人で用意されたテーマについて70分間ほど討論した。ほとんどの参加者が初めての経験であったが議論が白熱し、参加者からは良い体験であったとの声が聞かれた。

＊論文指導　初日に書いた論文を班ごとに分かれて本人が音読し、意図するところや考えを述べ、聞いている参加者の意見を聞き、指導者からのコメントを聞くという形式で実施した。参加者からは「大変役にたった」との声が多かった。

その後、閉講式を行い予定どおり研修会を終了した。準備段階や参加者の募集などで、大変お世話になった筑波大学学生部就職課の方々に感謝を申し上げる。

茗渓会事務局　高原　將（38東史）

[各都道府県教育界の諸先輩にお願い]

各都道府県の採用試験情報や教育行政の最新情報について先輩方を訪ねて教えを賜るように指導しています。教員志望の筑波大学生から、相談がありましたら、論作文の指導も含めて、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

（研修担当）

平成二十年度

筑波大学芸術賞、茗渓会賞決る

筑波大学では、平成九年度から、芸術専門学群における卒業研究及び大学院修士課程芸術研究科（現在、大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻）における修了研究のうち、特に優れていると認められたものを表彰し、これらの研究の向上に資するため、「筑波大学芸術賞」等を設けている。

以後、毎年、この制度による収集（買上、寄贈）を継続的に行い、受賞作品は芸術資料委員会コレクションの一部を形成している。

平成十八年からは「茗渓会賞」が創設され、二大芸術賞として選考され、総合交流会館多目的ホールで展示されている。

今年度の受賞作品名と受賞者氏名は次のとおり。

▽**筑波大学芸術賞**
（芸術専門学群）
○**iim**（彫塑）木・鉄　**酒井　恒太**
○**Kaleidoglobe**（情報デザイン）
アクリル、ガラス、電子部品　**池内　隼生**
（kaleidoglobe は世界中の最新情報を混ぜ合わせて観て楽しむ、情報化・グローバル化時代の万華鏡）
（大学院博士前期課程芸術専攻）
○**Modularity**（プロダクトデザイン）
木材、アクリル　**Yaniv Cohen**（ヤニブ＝コーヘン）

▽**茗渓会賞**（P7　はばたく若者たち　参照）
（芸術専門学群）
○**高野切古今和歌集第十六**（紙本墨書）**油田　望花**
○**演劇脚本の視覚的表現～シェイクスピア「夏の夜の夢」を題材に**　マット紙8点組　**榎本明日香**
（大学院博士前期課程芸術専攻）
○**風紋、自画像**（洋画）、油彩　**馬場　洋**

はばたく若者たち

多様な人々との出会い

山下　真実

父　山下勝也(58体育)母　山下睦子(58人間関係)が共に筑波大学の卒業とはいえ、生まれ育った広島を離れ一人暮らしを始めた筑波は「陸の孤島」。入学式で岩崎学長が「ひと月に一度は東京に出なさい」とおっしゃっていたのを今でも覚えています。

つくばエクスプレスが開通したのはその年の8月でした。周辺開発が進む現在のつくばは、都会すぎず田舎すぎない、学生にとって過ごしやすい環境であると感じられました。

そのような恵まれた環境で過ごした学生生活ですが、4年間のうちには迷い苦しんだ日々もありました。専攻分野の内容に意欲的になれず悩んだ時期は、暗闇の中にいるような気分にも陥りましたが、その頃、積極的に他学類の授業に参加したことで研究の糸口という光に辿り着くことができました。これは学際的研究を奨める筑波大学独特の履修制度によるところが大きかったように思います。

また、多様な関心を持った人々との出会い、人間関係の豊かさは私の大学生活に彩りを与えてくれました。

そんな思い出多き筑波大学を卒業後は、念願叶って教職に就くことになりました。

教員として、人や社会とかかわり合って生きることに喜びを見出せる子どもの育成に努め、子どもが夢に向かって挑戦できる社会づくりに貢献するという決意でおります。

高校生とともに成長を—

大窪望佐子

私は、大学時代に経済学を専攻しながら教職課程を履修し、家庭教師や教育実習等の経験を経て、教員になりたいという思いから筑波大学大学院へ進学しました。大学院での2年間は、教員採用試験の勉強と修士論文の執筆という2つの大きな課題に深く取り組みました。これらの時間があったからこそ、今の私があると思っています。

教員採用試験の準備にあたっては、友人と茗渓会の勉強会に参加し、先生や先輩方からたくさんのアドバイスをいただきました。教員採用試験を一緒に受験した方の中には、教職経験をもつ方もおられましたが、そのような方々とともに私が高等学校の一教師に採用していただくことができたのは、茗渓会の先輩方のご指導のおかげと、心から感謝しております。仲間とともに切磋琢磨した筑波での2年間は、私の大きな糧になると同時に、一生忘れることのできない貴重な時間になりました。

高校生は、アイデンティティーの確立を目指すなかで優越感や劣等感を味わったり、自他について考えをめぐらせる発達段階にあります。私も自己研鑽に励み、彼らとともに学び成長していきたいと考えています。日々悩みながらの教師生活になると思いますが、学び続ける姿勢を忘れずに励んでいく所存です。

教職研修会に参加して

中村裕佳子

昨年の三月、緊張しながら茗渓会の研修会に参加しました。合格体験談を話してくださった先輩方はすぐにでも教員として教壇に立てるような方々で、また集団面接や討論、小論文の指導を受けて、このままではいけないという危機感と刺激を受けて帰りました。

そして夏、大学の教室は暑さと共に勉強会に参加する人たちの熱気で満ちていました。研修会で知り合った同じグループの友人たちだけでなく、大学院の同じ研究科の友人たちなど様々な人を巻き込んで、面接、討論、模擬授業の練習を行いました。みな、教員を目指す人たちだけに、惜しみなくアドバイスや考えを伝え合いました。毎回の練習には本番さながらの緊張感で取り組みました。そこでは話す内容もそうですが、自分の姿勢や話す時の癖、試験準備の取り組み具合など、自分を客観的に捉えることができました。ふと教室を見渡すと、グループに分かれ、みなが真剣に練習している姿が目に入りました。その場にいられたということが私の心を充実感で満たしてくれました。私が教員採用試験に合格できたのは、一緒に勉強会で取り組んだ友人たち、研修会の先生方をはじめ関わった全ての方々のおかげです。春から、学校現場で関わる全ての方々や授業作りに試行錯誤しながらも真摯に向き合い、何事にも率先して取り組む教員を目指し歩んでいきます。

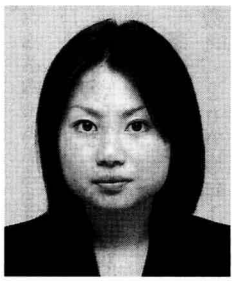
理科の大好きな生徒を育てたい

乾　大樹

私は、赴任する学校や北海道、そして日本の理科教育を大きく発展させたいと思い教員を志望しました。私は大学、大学院まで化学を学んできました。それは理科が好きだったからです。私が理科を好きになったきっかけは中学3年のときの理科の授業でした。授業の中で多くの実験・観察を行い、発見をさせてもらいました。その発見が面白く、どうしてだろうと考えているうちにどんどん理科を好きになっていきました。理科とは実験・観察によって自分の目で見たものから学ぶ学問であり、発

見することに面白さがあります。私は大学院まで学んだ知識を活かし、生徒に発見を与え、心に響くような授業を通し、理科の面白さを伝えることで、理科の大好きな生徒をたくさん育てたいと思い教員を志望しました。

私が教員採用試験に合格できたのは周りの人の支えがあったからこそです。夏休みには毎日面接や場面指導、集団討論の練習をしてくれた仲間、面接を中心に指導していただいた現職教員の方々、小論文の添削や色々な相談にのっていただいた研修センターの染谷先生のおかげで合格できる実力を身に付けることができました。また、毎日朝練に付き合ってくれた卓球部のみんなど、息抜きの時間を充実させてくれる仲間にも恵まれ、長い戦いを途中で息切れすることなく全力で走りぬけることができました。こんなに人に恵まれているものは他にいないと思えるくらいです。人脈で摑み取った合格といっても過言ではないように思います。これからも人と人との繋がりを大切にし、理科の大好きな生徒を育てるという目標に向かって毎日努力していきます。



楽しみながらの復元を

油田　望花

十一世紀半ば、三人の能書（第一種・第二種・第三種）が二十巻を分担揮毫（寄合書き）した「高野切」は、『古今和歌集』現存最古の写本であるとともに仮名の書美の典型を示すものですが、今日その一部が遺るのみです。

そこで、卒業制作として第三種筆者が揮毫したと推定される巻十六を復元し、全四・三メートルの巻子に仕上げました。一年以上前から取り組み何度も書き直しをしました。自分の力のなさを感じる毎日でしたが、納得のいくまで書きました。当時はこのような姿であったであろうと想像し楽しみながら復元に取り組むことができました。私にとって、筆で文字を書くということは、ただ単純に好きなことであり、楽しいこと。しかしこの四年間、ただ楽しいことだけでなく、自分の力のなさに落ち込んだり、悔しさをバネに頑張ったり、様々なことを考えさせられた学生生活だったと思います。何よりこの仲間で学べたことが幸せでした。

このたびの茗渓会受賞は、昨春他界いたしました父への何よりの報告となりました。両親の支えや、また、指導をして下さった先生方、先輩方、お世話になった皆様に感謝いたします。そして、今後の歩みへの大きな励みとさせていただきます。

音楽も演劇も時間芸術のひとつ

榎本明日香

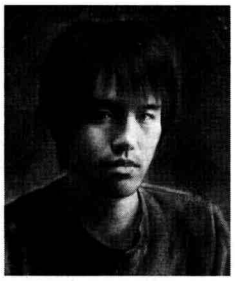
茗渓会賞という身に余る賞を頂き大変嬉しく思っています。このたびは本当にありがとうございました。

受賞したこの作品ではシェイクスピアの「夏の夜の夢」の脚本を、図形や文字の構成によって視覚的に表しています。制作のヒントとなったのは一九五〇年～七〇年頃に音楽界で流行した図形楽譜です。図形楽譜とは一般的な楽譜とは異なり、五線譜や音符ではなく、作曲家が独自に提案した図形や配置のルールが用いられたものを指します。この作品でも同じように構成や文字の配列に工夫をこらすことで、目にした人が演技のイメージや場面の雰囲気などを感じ取れるものを目指しました。

この作品は七つの場面を描いたパネルとあらすじや制作意図をまとめたパネル、合わせて八点の作品です。画面の右下に共通のエンブレムを配置することで、作品としての一貫性を保っています。画面右側には日本語でセリフとト書きが、左側には英語で場面の動きや雰囲気を表現した構成が成されており、両者にまたがるようにして簡単なあらすじが載っています。また、右上には場面の番号とともに時間軸が示されています。

音楽も演劇も広い定義では同じ時間芸術のひとつとして数えられるうえ、楽譜と脚本はそれらの時間芸術を体現するための指示書としてよく似た役割を内包しています。そこで図形楽譜と同じく構成や文字の配列に工夫をこらし、目にした役者が演技のイメージや場面の雰囲気などを感じ取れるものを目指して脚本をデザインしました。グラフィックアートとしても観賞してもらえるように、本の形をとらずにあえてパネル作品に仕上げています。

制作中は苦しい思いもしましたが、長い時間をかけてひとつの作品と向き合えたことは幸せな経験でした。卒業後には私は社会人になりますが、日々の生活に追われるばかりでなく、筑波大で培った、様々な分野への興味と物事をじっくり考える姿勢を忘れないようにします。



風は何を運ぶのか

馬場　洋

筑波大学大学院博士前期課程芸術専攻では、絵画制作の技法や理論、哲学、絵画観など多くの事を学ぶ機会を得ることができました。未熟ながら自分なりに解釈し、二年間を通して得た言葉にならない事柄を、修了制作に繋げることができました。

作品「風紋」についてですが、風は何を運び、そして何を持ち去っていくのか、繰り返される無常の変化をテーマに制作しました。風が砂に「風紋」を残していったように、無常の世界の中でひと時でも自身の想いのかたちを残していきたい。白馬は、風のように何かを新しい地へ運んでいく存在であるという意味合いを込めています。

「自画像」については、自身はなぜ絵を描くのかを日頃から自問しています。己とは何者なのかについて正面から見つめ、描写しようと思いました。

この度の茗渓会賞の受賞を励みに、さらに制作に精進してまいりたいと思います。

（肖像は本人の作品から）

第13回 茗渓・筑波グランドフェスティバル開催

日 時　平成21年1月31日(土)
午後1時30分～

場 所　筑波大学大学会館、
第一エリア食堂

茗渓と筑波の「環」を拡げる

茗渓・筑波グランドフェスティバルは今回で第13回を数え、2009年1月31日(土)に筑波大学大学会館を中心にして開催されました。本フェスティバルも十二支で言えば、ひとまわりしたことになり、今回の第13回大会は、新たな発展を期すための場としても重要であると考え、実行委員、学生委員を中心に企画運営にあたり、当日の学生スタッフにも多大な協力を受けました。

1月31日はあいにく、雨模様で強風とも重なり、常磐線が一時不通になる等悪条件が重なりましたが、当日の参加者約200名、参加費を払っていただき当日都合で来られなかった方も含めると約240名の方々から参加へのご協力をいただきました。

本フェスティバルは、筑波大学と前身の諸学校・大学の卒業生・修了生などが、世代を超えて交流し、親睦を深め、同窓の輪を拡げることを目指して開催されるようになったものです。第7回大会までは、大塚キャンパス、茗渓会館を中心として東京地区で開催され、第8回大会からは筑波大学と東京地区の隔年開催になっていました。その後、総合交流会館のオープンやつくばエキスプレスの開通などがあり、筑波大学での連続開催に関して、関係者のご協力が得られたため、昨年の第12回大会の筑波大学開催に引き続いて、本年の第13回大会も筑波大学で開催致しました。

新井達郎実行委員長

筑波大学大学会館にて

当日は12時から展示企画を行い、13時30分から講堂でオープニングセレモニー、14時からシンポジウムを開催しました。展示企画は、「Seven Wonders of the HUMAN-BEING」と題して様々な切り口からヒトを扱った研究内容を中心に筑波大学における研究内容の一端を知っていただけるように企画しました。

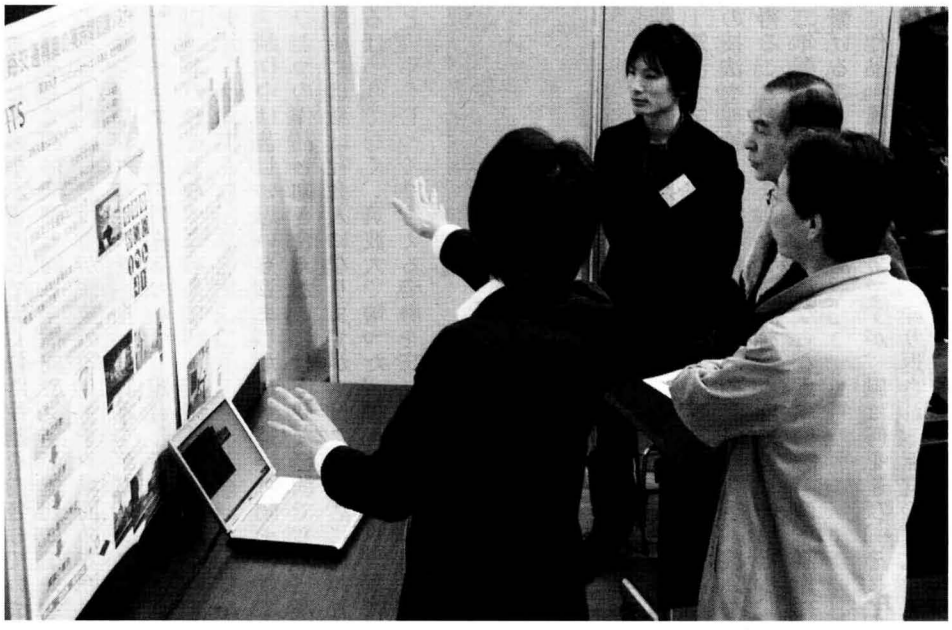
オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、最初に、大会副会長の筑波大学理事副学長の腰塚武志先生から大会開催のご挨拶をいただき、その後、実行委員長の新井達郎より企画の説明と支援に対する謝辞を申し上げました。続いて、茗渓会から大会への支援金の目録が、江田昌佑茗渓会副理事長から腰塚副学長に贈呈され、江田氏からご祝辞をいただきました。

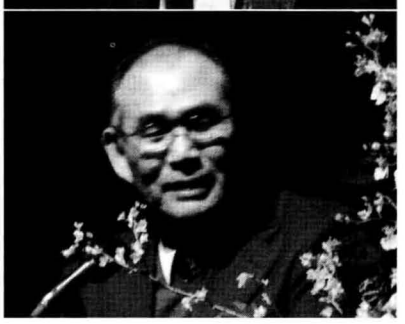
シンポジウム

シンポジウムでは、「人材育成の現場～研究・芸術の現場から～」と題して、講演者の先生ご自身の抱負な経験をもとに人材育成に対する普遍性、独自性、問題などについて研究、教育をからめてご講演いただける企画にしました。

講師として、理工学群物理学類長である、大学院数理



玉川信一氏



中井直正氏

物質科学研究科の中井直正教授から「研究における人材育成」に関する講演と、芸術学系長をつとめられている大学院人間総合科学研究科の玉川信一教授から「芸術における人材育成」に関するご講演をいただきました。

中井直正氏は、電波で見る宇宙、日米欧の次期超大型計画（アルマ計画）で宇宙から来る微弱な電波を観測し、宇宙がどのようにできるのか、銀河がいつ、どのように誕生したかなどを解明する最先端の研究プロジェクトに言及され、さらに、研究手法のことカタカナ語の氾濫や日本語はダサイか、欧米追随を考え直そうなど引きつけられる内容のお話をお伺いしました。

また、最後には、大学の人材育成で最も大きな課題である、学生への教育や研究指導に関連して、不思議だなと思わせるための工夫、講義内容や方法、試験や入試の再検討なども含めて、大学にいる間にみずから学ぶことを学生が身につけることが大事であるとの言葉で締めくくられました。

玉川信一先生は、「絵具の白より明るい月をどうやって描いたらいいだろうか」との問いかけに関する考えから話を始められました。

偶然では不可能であるが、どうやって可能性に近づくか、そのためには基礎的技術の習得が必要であり、また、個性的表現は積み重ねられた意思によって形作られると、美しい物をみると哀しくなるのは感性の芽生えであるなどを前置きにされ、ご自身の体験を学生時代からそれぞれの過程を経て、パリでのこと、回顧展まで絵画をいくつかお見せになり、モローの教育についてもご紹介されました。

さらに、人材育成に関して、造形的な感覚を養うため基礎教育の充実、それぞれの体質・感性を見極め適切な示唆を与える。生涯教育、準学会としての公募団体における発表活動などの重要性を話され、人材育成の現場としては、育成する立場、育成される立場、恩師から先輩へ、私へ、後輩へなど縦のつながりと橋渡しも重要であることを強調されました。

このように、2人の講師の先生には、ご自身のこれまでの研究経歴、製作経歴から、恩師、先輩、学生にいたる学問の橋渡しと人材育成に関して聴衆を引きつける講演をしていただき、あっと言う間に時間が過ぎてしまった印象でした。

講演後、いくつか会場からも質問やご意見をいただき、会場と一体のなった、有意義な時間で聴衆は大いに満足されていたようでした。

展示会場

恒例の展示に関しては、「Seven Wonders of the HUMAN-BEING」と題して、大学会館ホワイエで12時から15時30分まで、5研究室（ビジュアルサイエンス研究室、実験言語学研究室、視覚情報処理研究室、三河研究室、柔軟ロボット学研究室）の出展と学生団体の1件（筑波宇宙プロジェクト）の出展がありました。

さまざまな切り口からヒトそのものとヒトと社会に関する内容、学生団体の活動に関して、参加者の関心を集めた展示でした。

プレ企画

茗渓・筑波グランドフェスティバルの当日に、フェスティバル参加に合わせて、同窓会、同期会、ＯＢ・ＯＧ会の企画の募集を行い、会場の手配等便宜をはかり、茗渓・筑波グランドフェスティバルをさらに活発な広がりのある大会にする企画を今回から考えました。文科系サークル連合会ＯＢ・ＯＧ会が実際にこの機会を利用して同窓会を行い、茗渓・筑波グランドフェスティバルにも同時参加されました。

懇親会

懇親会は第一エリア食堂において17時15分から開催され、大会副会長の腰塚副学長の祝辞、5名の関係者による鏡開き、大会参与の江田昌佑氏による乾杯などのあと、世代を超えた交流を楽しみました。

最後に恒例の宣揚歌を実行委員藤堂良明氏の指揮のもと全員で輪になり肩をくみ斉唱し、筑波大学と同窓会茗渓会の発展と来年の再開を約束して散会となりました。

おわりに

強風吹き荒れる寒さの中、開催された第13回大会も出席者の方々から好評をいただき、今後とも発展させて行くように激励をうけました。これもひとえに関係され、陰に陽にご援助ご協力いただきました関係各位のおかげです。

とりわけ、西野虎之介理事長をはじめとする茗渓会本部の皆様方、岩崎洋一学長並びに筑波大学本部の皆様方、大学会館の職員の皆様、教職員各位、紫峰会の職員の皆様方からは、物心両面のご援助とご協力をいただきまして、厚く御礼申し上げます。

グランドフェスティバルを筑波大学と同窓生の交流の場としてさらに発展させていくことが出来ますよう、皆様方の一層のご支援をお願い致します。

新井達郎（昭56筑博化）

茗渓会の公開講座から

誰が英語をつくったか

講師　藤原保明（筑波大学大学院教授）

平成21年2月14日(土)　東京・茗渓会館

講師紹介　東京教育大学大学院修了、文学博士。熊本大学、筑波大学助教授、ロンドン大学客員研究員を経て現職。『古英詩韻律研究』、『古英語の初歩』、『英語の語形成』などの著書、『中世の食生活』、『古英詩の世界』などの翻訳書がある。

――英語史の研究を長年つづけてこられた藤原先生の講演には、急遽、椅子を追加するほど多数の方の参加があった。講演は、今から約1300年前、遣唐使として派遣され、帰国間ぎわ36歳で客死した井真成の墓誌が近年中国で発見されたお話から始まった。日本人が盛んに中国から学ぼうとしていたちょうどその頃が、今日のお話の英語の夜明けの時期なのである。

タイムスリップしてみると

今からアメリカ人を連れてその頃のイギリスへタイムスリップして出かけたとしましょう。アメリカ人は自分の英語が全く通じなくて、こんなはずではなかったと思うでしょう。ところが、日本人は意外なことに、聞き慣れた言葉がたくさんあることに驚くにちがいありません。なぜそのような不思議なことが起こるのでしょうか。原因はその頃の英語にあります。

今の英米人は「アイウエオ」をそのまま発音することは苦手ですが、当時の英語では、日本人が母音をそのまま発音するのと同じように発音していました。たとえばhata(敵)はハタと、mago(息子)はマゴと、nama(名前)はナマというぐあいに、そのまま発音したのです。一方、語中で同じ子音が重なるとダブって発音しました。たとえばbucca(牡鹿)はブッカ、lippa(唇)はリッパと、ダブって発音しました。ところが今の英語では、appleとかlittleの二重子音をダブって発音しないことから、英米人は「部下」と「物価」、「行く」と「一句」を、日本人のように区別して発音することは得意ではないのです。

最古の英語では、語順も日本語に似ていました。例えば主語＋目的語＋動詞（SOV）という語順もありました。日本語の「話せる（＝話す＋できる）」のように、助動詞と本動詞の位置が逆転するなど、日本語と同じ特徴がいくつもみられます。

英語の夜明け

本論に入りまして、「誰が」英語をつくったかを考えてみます。英語の場合、英語をつくったといえるような個人あるいは部族がいるのです。それを紹介していきましょう。

まず英語の誕生以前の時代です。ジュリアス・シーザーがブリテン島を攻めたのがBC1世紀、ローマ人がイギリスへ行った最初でした。その後、ローマが本格的にブリテン島を支配し、ケルト人は支配下におかれました。しかし、しばらくして3世紀末になると、ゲルマン民族が押し寄せ始めます。ゲルマン民族の一派であるジュート人がユトランド半島、今のデンマークのあたりから移住目的で来襲しました。

5世紀中頃から、エルベ川流域のアングル族やその南のサクソン族がイギリスに定住をはじめ、6世紀頃からかれらの王国が次々と成立、抗争と興亡を繰り返しました。アングル族の国と呼ばれたことから、イングランドやイングリッシュが出てきました。アングル族の方が言葉や国を代表するようになり、8世紀の初めには最も古い英語ができあがりました。

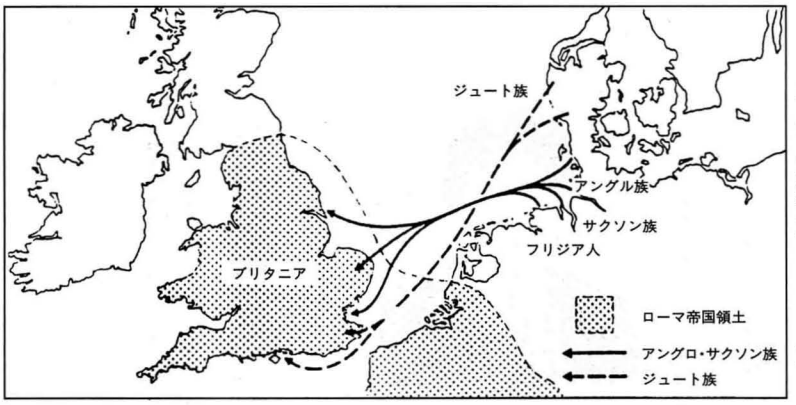
古英語の時代

8世紀には英詩では最古・最大の叙事詩『ベーオウルフ』が口承で成立します。日本の平家物語のように、竪琴を弾きながら吟唱されました。また、尊者ビードが『イングランド教会史』をラテン語で完成させ、貴重な記録となっています。

8世紀の終わり頃、今のデンマークからデーン人がイングランドへ上陸しました。海賊行為をやっていたバイキングのことです。しかし9世紀にアルフレッド大王がデーン人の侵攻を一時的に阻止し、イングランドを統一しました。この王は文武に優れ、学問を奨励するなど、偉大な王でした。この頃『アングロサクソン年代記』の編纂が始まり、10世紀には各地の修道院で口伝を記録するなど、文芸活動が活発に行われました。

英語の発達を時代区分すると、Ⅰ古英語期、Ⅱ中英語期、Ⅲ初期近代英語期、Ⅳ近代英語期、Ⅴ現代英語期、と5期に分かれます。

――ここで藤原先生は古英語の聖書の一節を、流麗に読み上げ、中英語期、近代英語期と比較した。



ゲルマン人のブリテン島侵入図

中英語期の出来事

古英語は現代のイギリス人にも全く理解できない言葉ですが、中英語になるとわれわれでも少しは分かるようになります。では、初期近代英語になるとどのように変わったか、これらを比較するには聖書がよいのです。聖書は厳密にその時代の英語で書かれているので、英語の変遷がよくわかるのです。なぜそのような変化が起こったのか、その時代的な背景を探ってみましょう。

11世紀、ノルマンディー地方の公爵ギョームがノルマン王朝を開きウィリアムⅠ世となりました。今のエリザベスⅡ世の直接の祖先です。大陸育ちなのでフランス語しかしゃべれません。ノルマン王朝ではフランス語が支配者の言葉となり、英語は日陰に追いやられてしまいました。13世紀初めジョン王がフランス王フィリップⅡ世との争いに敗れ、大陸の領土を失うと、英語は再び貴族階級の母語となり始めました。14世紀中頃からフランスとの100年戦争が始まると、フランス語は敵の言語ですから影響力はさらに低下します。この頃、黒死病が大流行し人口の約3分の一が死亡するほどでした。貴族は労働力の減少に苦しみますが、農民は逆に発言力を増し、彼らの話す英語の重要性が高まることになりました。14世紀末、宗教改革の中心人物ジョン・ウィクリフが聖書の英訳を完成し、また、英詩の父といわれたチョーサーが『カンタベリー物語』をロンドン方言で書き、標準語の確立に大きな影響を与えました。ワット・タイラーの農民一揆も下々の者の英語が発言力を持つようになったことを象徴しています。こうして、15世紀には英語が書き言葉として一般に採用されるようになりました。ウェストミンスターに印刷所が開設され、チョーサーの作品なども印刷されました。この印刷術の普及のために、当時の英語は、音は変わりましたがスペルは今も生きているのです。

初期近代英語の時代

16世紀には、イギリスはヨーロッパへ打って出ました。小国だったのが国力を増していき、産業、文化、学問が発達してくると、言葉が不足するようになりました。牧師・詩人のジョン・スケルトンは、1500語もの外国語を新語として導入しました。ヘンリー8世がカトリック教会と絶縁してイギリス国教会を樹立したので、聖書はラテン語に依存しなくてもよくなり、英語による独自の聖書がつくられるようになりました。16世紀中頃から、エリザベスⅠ世の治世になって、イギリスは新大陸に進出し、ヴァージニアのジェームスタウンに植民地を築きました。この頃スペンサーの『神仙女王』が出版され、ベン・ジョンソンの『十人十色』が初演されます。17世紀になるとシェイクスピアの4大悲劇が書かれ上演され、英訳聖書の決定版として『欽定訳聖書』が完成しました。

英語はどのように変わったか

では、現代英語になるまでに何が変わったのかみてみましょう。文字と綴り方、発音、語彙、語順などでみることが出来ます。

長母音はどのように変わったかについて、中英語から現代英語への変化をみてみますと、スペルはほとんど変わらないのに音が変わるということがあります。例えばmineはミーンだったのが今はマインです。meatはメートがミートになりました。houseはフースからハウスになり、moonはモーンだったのがムーンになったのです。すなわちオーがウーになったのです。

次に語形の変化をみます。

古英語ではse dola cyning 'the foolish king' ~ dol cyning 'foolish king' のように、冠詞の有無によって形容詞の語尾が異なりました。その後、形容詞の語尾が弱化し、消失しただけでなく、名詞や動詞などの語尾も徐々に弱化し、現在のように単純になりました。イギリス人がバイキングといっしょに生活するようになってから、違っているところを強調しないで、お互いに解るところでコミュニケーションしようとしたので、違ったところは不要となり、語尾は最少限ですますことになったのです。

また、単語の借用がみられます。ケルト語の影響やラテン語からの影響、スカンジナビア語の影響など、多数がみられます。フランス語とラテン語の影響はさらに大きく、宗教・政治・軍事・文化などの影響が単語の面でもあらわれているのです。『ユートピア』を書いたモアやシェイクスピアなどの詩人や劇作家たちは、実に多くのラテン語やフランス語の単語を英語に取り入れ、英語の表現力の向上に貢献しました。

――講演の最後に藤原先生は、「英語を楽しむ」ということで、中英語と現代英語を比較して、綴り字と発音の関係、語順をひっくり返す、単語の意味が変わる、などの例をたくさんあげて、楽しい学習の出来る英単語の材料をたくさん提供された。一例をあげると、foodのooにはオーと発音していた名残りがあるし、busはブスだった、また、appleのppにはダブって発音していた頃の名残りがある、といったものだった。

参加者からの感想――

◆久しぶりに知的好奇心をかき立てられる時間を持つことが出来た。音声の変化は日本語にもみられる現象なので、例えば第二部で、その比較もあればさらに興味深い。

◆英語の歴史には、ブリテン島を中心にしたいろんな民族の勢力争いとか、宗教のことが関わって変化したことがよく分かった。自分の知っている英語もその流れの一部だと思うとおもしろいと思った。

◆日本語と英語の変遷の違いが、それぞれの国の持つ歴史に強くリンクしている事実を非常に興味深く感じた。また、スペルと発音の相違についてのお話を聞いて、長年の疑問が解けてとても楽しかった。

山梨支部教養講演会から

自分を好きになろう

講師　鈴木　徹（北京パラリンピック選手）

――茗渓会山梨支部では、平成20年12月6日(土)に甲府のＫＫＲニュー芙蓉において恒例の教養講演会を開催しました。山梨支部では12回目。今回は講師に北京パラリンピックの走り高跳びに出場し、日本選手団の旗手も務めた鈴木徹氏（H16筑体卒）を迎え、「自分を好きになろう」という演題で行いました。

当日は、本部からは加賀谷文康理事のご出席もいただき、茗渓会員のみでなく小学生を含め40名弱で鈴木氏の講演を聴くことができました。加賀谷理事から、たまたま鈴木氏が、茗渓会が茗渓創基130周年を記念して設けた顕彰事業で本年度の顕彰者に選ばれたばかりであるとのお話もあり、時宜を得た講演会となりました。

この度の教養講演を実施するに際しては、会員に文書で連絡するほか、せっかくの機会なのでポスターを作成して甲府市と近隣市町の役所、図書館などに掲示しＰＲにつとめました。

鈴木氏は高校時代（駿台甲府高校）まで、ハンドボール選手として国体に出場するなど活躍していました。(高校時代のハンドボールの試合で活躍する鈴木氏のビデオも上映されました)。大学でもハンドボールをしたいということで筑波大学体育専門学群に推薦合格。しかし合格決定後、普通自動車免許を取得しドライブ中の明け方、自らの居眠り運転でガードレールに衝突。事故車から救出してくれた隊員に「ハンドボールはできるでしょうか」と聞いたそうです。この事故が原因で右足膝下11cmを残して切断しました。

今では、健常者と同じように歩いたり、走ったりできますが、このようになるまでのリハビリの苦労をスライドを交えて話していただきました。怪我をして初めて自分が両親はじめ多くの人の世話になっていることに気が付いたこと。義足については義肢装具士の臼井氏との出会いが大きな転換点となり、自分の可能性を開かせてくれた機会となったこと、等々。当日は用途別の義足もいくつか持ってきてくださり、実際に触れさせていただきました。競技用の義足はもっと簡単に撓ると思いましたが、撓らせるには思った以上に力が要ることもわかりました。

北京はシドニー、アテネに次いで3度目のパラリンピック出場であったが、観客が確実に増えてきているとのことでした。特に北京での観客の声援は大きな力になったそうです。パラリンピックは厚労省の管轄で約2億円くらい、一方オリンピックは文科省で約24億円くらいそれぞれ予算がつくそうです。近年障害者スポーツがメディアに取り上げられる機会が増えてきてありがたいが、若い層の障害者の方々がもっとスポーツをやるようなって欲しいということでした。

5歳の時からどもりが始まり人前に出ることが苦手であった。脈拍が極端に少ないという心臓の障害も抱えていた。しかし、右足を失ったことを契機に8年ほど前に初めて講演をやったところ、1時間話し続けることが出来て自分でも驚いた。先入観を持たずに、来たものは拒まないでやってみることで自分の世界を広げることになると考え最近は積極的に講演をするようになった。自分のコンプレックスを思えば思うほど落ちこむので、自分の良いところを見るようにするのがよい。自分に悪いところがあってもよい。それが個性だと考え、何か一つでも他人に負けないものを持つようにすること、夢を持つことが大切だと話されました。

明るく、さわやかな人柄の中にも内に秘めた強い意思を感じさせる鈴木氏の話に、参加者一同は熱心に耳を傾けていました。

文責　山梨支部事務局長　山本英樹（56筑一自）

東京／芙蓉会・四月会講演会から

先生のためのことばセミナー

講師　花田　和明（ＮＨＫアナウンサー）

――平成20年10月19日、ＮＨＫアナウンサー花田和明先生を講師として迎え、「『話しことば』をわかりやすく的確に」と題して講演していただきました。

「話す」ことは、学習指導要領において、国語だけでなくさまざまな教科科目を通して指導していくことが示されています。また、日頃のコミュニケーションを円滑に進めるために、「話しことば」を大切にしていかなければなりません。教員にとって「話しことば」の力量を生徒に付けさせるだけでなく、様々な人と意思を通じ合わせるためにも、自ら「話しことば」の力量を高めることが大切であると、次のようなお話がありました。

第一に「話しことば」は「音のことば」であり、話したことは瞬時に消え、形に残らないという特徴があります。このことをふまえて、わかりやすく的確に話すためには、大事なことはなるべく早く伝えることが必要になります。話すときに、まず結論を先に述べることに努めることです。第二に相手が話を聞きやすくするために、文は短くすること、例えば一センテンスあたり一情報に絞ることなどに努める。第三に日本語には同音異義語があり、音は同じでも意味が全く異なってしまうことに注意が必要です。第四にあいまいな発音では相手に正しく伝わらない場合があります。こうした話しことばの特徴に気を配りながら、話すことが必要であることを分かりやすく説明していただきました。

――講義とともに、参加者で2、3人のグループをつ

くり現実の場面を想定した演習を行いました。第一に「説明力」をみがくための例題を提示していただき、話し合いを通して改めて説明する力を考えました。第二に伝えるべき情報を整理し、話を組み立てることに取り組みました。研修参加者は教員19名でした。日頃生徒など多数の相手に、一定の内容を、一定の時間で筋道を立てて話すことが必要とされています。協議しながら、こうすればよい、ああすればよいと多くのことに気付き、話の組み立て方について学ぶことができました。

――今回の講演を通じて、話す力をつけるためには聞く力を伸ばしていくことも大切なことが分かりました。花田先生のわかりやすく熱心な講演によって、さまざまな場面で話す上での基本的な考え方、技法を身に付けることができました。

文責　荒川　洋（52教大物）

東京都教育研究懇談会から

シンポジウム 今日は本音で語ろう！中学、高校

――本年も、年も押し迫る12月13日(土)、東京都の教育管理職50名弱の同窓が集まり、茗渓会館で教育研究懇談会を開き、教育について熱く語り合いました。

はじめての企画として行ったシンポジウムは、「今日は本音で語ろう！中学、高校」と題し、コーディネーターとして高橋基之(豊島区立西巣鴨中校長)、パネリストとして、中高一貫校の立場から井田良克（都立武蔵中・高校長)、中学校の立場から阿部邦幸(練馬区立石神井西中校長)、小中一貫校の立場から山村幸太郎(八王子市立高尾山学園中校長)、中堅普通科高校及び定時制高校の立場から宮田茂(都立足立高定時制副校長)、専門学科高校の立場から徳田安伸(都立農産高校長)、そして保護者の立場から、経営コンサルタントとして活躍し企業経営等に精通した塩津真（㈱キャリアアンカー代表）の各氏から、それぞれの立場での基調報告を受けて論議を深めました。

――本年、小中学校の新学習指導要領が告示されましたが、学校には、社会に貢献する人材の育成が求められています。そこで、社会で有用な人材として児童・生徒を育成するためには、小、中、高でどのような教育活動が必要であり、そのための指導はどのように行っていくか、また、成長段階を踏まえながら、各学校がどのようにお互いに情報を共有しながら協力していくかについて、本音で語ることを趣旨に協議を行いました。

――井田氏からは、東京都の中高一貫校の概要に触れながら、中高一貫校として、授業や行事、部活動を行っていく際、具体的には制服指導等の生活指導や分掌運営等において、中学校教員と高校教員との間に大きな意識の違いがあり、一つの学校としての意志の共有化に苦労している実態があることが報告されました。

阿部氏からは、中高連携を実際に行っている中学校と高校の実態を踏まえながらも、私学や都立の中高一貫に進もうとする中学生を、どのようにして地域にとどまらせ、生徒を育てていくか、地域に根ざした中学校の有り様にも触れ、今後、高校との人材交流の必要性について報告されました。

山村氏からは、不登校児童・生徒の現状に触れながら、家庭との連携の難しい現在の社会の実態とともに、高校進学が見えてくると学力向上に対するプレッシャーが生徒たちに増していく状況と、保護者からは学力をつけてほしいという強い要望があることが報告されました。

宮田氏からは、都立高校が特色化の中で分化していく中、普通科中堅校が特色化を打ち出していくことに苦慮したが、地域連携に活路を見いだしたことに触れながら、地域の様々な活動により、生徒が様々な人との出会いを通して達成感や充実感を味わい成長したことが報告されました。定時制においても地域から期待されている状況について報告されました。

徳田氏からは、心の偏差値というキーワードとともに、学力はもとより、生徒が社会に出て活躍する際の力として必要な（人としての）有用感やコミュニケーション能力等の育成にあたっては、地域の活動が欠かせないことが報告されました。具体的には、地域の活動を通して、技術力・企画力・相互理解力が育成され、そのことにより、生徒の学習意欲や進路に対する期待度などがスパイラル的に向上していくとのことでした。

最後に、塩津氏からは、社会に出て必要とされる、3つの力、すなわち、前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)、という社会人としての基礎力に触れながら、小中学校での基礎学力に加え、高校でこれらの力の一層の育成が大事であることが報告されました。また、保護者として中高一貫校への期待と課題について、生徒の学習の意欲の観点から話がありました。

――これにより、会場からも、私学を含めた中学生の高校選択の実態等にも触れながら、地域連携の中での小・中・高・大の連携や、教員の人的交流の必要性などについて協議が深められました。そして、今回の協議をきっかけにして、今後さらに、具体的な連携等について調整・協議していくことを確認しました。

文責　高橋基之（53筑一自）

平成21年度　茗渓会公益事業計画（案）

1．公開講座等の開催（前年度から継続）

(1)　文芸等の公演　つくば地区開催は筑波学都資金財団、紫峰会の協賛、地元県、市当局、教委等の後援

対象　一般、

東京地区は、会場・茗渓会館―6月20日(土)、つくば地区は、筑波大学大学会館―9月26日(土)

テーマ　「平安朝の女性像から」(仮題)～作品解説、朗読で探る。講師　幸田弘子氏(交渉中)

(2)　教養講座　つくば地区開催は筑波学都資金財団、紫峰会の協賛、地元県、市当局、教委等の後援

対象　一般、講師は外部講師、筑波大教員、茗渓会員等。

①　東京地区は、会場・茗渓会館＝年間3回程度開催＝

テーマ　「地雷除去」「色を科学する」「食品衛生」等。

②　つくば地区　会場・筑波大学構内、筑波学都資金財団研修センター内＝年間2回程度開催＝

テーマ　「誰が英語をつくったか」等。

(3)　キャリア情報等の講座

対象　大学卒業予定者のうち就職希望者、卒業後転職希望者等

①　9月～3月の期間　毎月1回以上実施　講師等の派遣　　筑波大学、学都資金財団と共催

②　3月中　　研修講座の企画、実施　　〃　　〃

(4)　現職教育研修講座

対象　主に中高教職員

教育現場で当面する課題等を参加者相互による自由討議　東京各支部等と共催

2．顕　　彰（前年度から継続）

社会貢献功労者を顕彰する。一般社会人（個人、または団体）を候補対象とし、特に青少年を積極的に顕彰する。(次ページ参照)

3．追悼のつどい（前年度から継続）

日時　9月12日(土)　　会場　東京・茗渓会館

4．季刊誌「茗渓」の発行（前年度から継続）発行の時期(号) 春、夏、秋、正月

主な掲載内容

・巻頭特集(予定)～正月号は理事長、ゲストの話。春号、秋号は主にゲストの話。夏号は総会報告。

・ほかのページ　読者等からの投稿、公開講座からのリポート、執筆依頼原稿、会員情報等

5．後援、協賛、協力等（前年度から継続）対象　支部、関連団体等が開催する公開講座等の公益事業

以上の公益事業計画(案)は、理事会の承認、通常総会の議決を経て確定、実施される。

第８回「顕彰」候補者の推薦依頼について

茗渓会が主催する顕彰事業は、茗渓創基130周年を記念して始められた公益事業です。平成21年には第８回を迎えます。

顕彰対象は、地域社会にあって広く社会に貢献している青少年や一般社会人です。今回も、候補者を積極的に発掘し、下記の要領により、推薦していただきたい。ただし、公益法人としての事業の趣旨から、政治家、現職の公務員等を避けるほか、現在、本会の本部、支部の役員等の役職にある者は対象外とされたい。なお、本会会員であっても、その社会貢献の実績が社会的に評価されている場合はその対象から除かない。

また、社会的客観性を高めるためにも、当該地の教育委員会、新聞社(支局を含む)、放送局あるいは関係団体、有識者、本会会員各位からの提案、参考意見等を積極的に求められたい。

記

(1) 顕彰対象　社会貢献功労者　一般社会人（個人または団体）を対象とする。
特に青少年を積極的に推薦されたい。

(2) 推　　薦　支部および本部理事から候補者を推薦する。推薦にあたっては、世代、地域、職業等にこだわらず、全国的な広い視野から、候補者を推薦されたい。

(3) 選　　考　推薦された候補者の中から選考委員会において顕彰対象者を選考する。選考委員会は副理事長を委員長とし、内(各部長)外(理事長が委嘱した有識者)の委員により構成する。

(4) 推薦締切　候補者の推薦締切は平成21年９月末日までとし、関係書類を本部事務局へ提出されたい。

(5) 顕彰式等　顕彰者を本部へ招いて、顕彰式、祝賀会を実施し、顕彰録を刷成して関係者に贈呈する。また、顕彰者の社会貢献活動の概要や横顔等を、季刊誌『茗渓』に掲載、周知する。

通常総会開催のご案内

社団法人　茗　渓　会

社団法人茗渓会では、平成二十一年度通常総会を、左記の通り開催しますのでお知らせいたします。

記

日　時
平成二十一年五月二十八日(木)
午後二時〇〇分から四時〇〇分まで(予定)

場　所
茗渓会館二階「茗渓」の間

議　題
①平成二十年度事業報告の件
②平成二十年度決算報告の件
③平成二十一年度事業計画(案)の件
④平成二十一年度予算(案)の件
⑤理事・監事改選の件
⑥その他
また、総会終了後、出席者懇談会を予定しております。

・茗渓会各支部の支部長、代議員の方々には、あらためて別便でご案内いたしますが、出席を予定しておいてください。
・なお、都合で出席できない場合は、代理者の派遣をお願いいたします。

茗渓ソフトテニス 百二十周年を祝って

軟式庭球部部長　清水　諭
（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

昨年8月23日（土）つくば国際会議場において、茗渓ソフトテニス百二十周年記念式典・パーティーが開催されました。東京教育大学―筑波大学の軟式庭球部OB・OGたち82名と現役部員30名に加えて、来賓の方3名が集い、盛大な会が催せたことは、大きな喜びです。

式典では、冒頭に高翔会（茗渓ソフトテニスOB・OG会）会長である古谷三郎氏（昭和31年英文卒）の挨拶を長野順一氏（副会長：34年体育卒）が代読し、続いて江田昌佑茗渓会副理事長から来賓代表の御祝辞をいただきました。イギリスで生まれた「スポーツマンシップ」に言及されながら、東京高等師範学校に始まる我が国のスポーツ文化について、貴重なお話を賜ることができました。改めて感謝申し上げます。つづいて、百二十周年記念誌『勝てて楽しめるソフトテニス：茗渓ソフトテニスの知恵と技』、記念Tシャツ・記念ネームプレートの紹介、監督である宗像敏夫氏（50年数学卒）から現役部員紹介と挨拶があり、宣揚歌の斉唱とエールが行われました。

引き続き行われたパーティーでは、與語靖洋氏（実行委員長：56年生物卒）、北澤徳之氏（紫峰会）、室谷洋平氏（ヨネックス株式会社）の挨拶の後、藤善尚憲氏（31年体育卒）による音頭で乾杯しました。和やかな歓談のなかで、世代ごとのスピーチ、庭球部歌の斉唱、スライドショー（「茗渓ソフトテニス120年の歩み」）が行われ、会は一層盛り上がりました。女子部1期生である岸本弘子氏（36年体育卒）の挨拶の後、今度は参加者全員が肩を組んで宣揚歌を歌い、三々五々、二次会、三次会に繰り出しました。

翌日開催された筑波大学クレーコートでのテニス大会（総勢80名参加）は、駆けつけた古谷会長の挨拶のあと、往年の大先輩たちによるラリー、全員によるボレー練習、そして年代・性別を超えた混成チームによる団体戦が行われました。ペアの年齢「オーバー140」あり、オーバー40を若干過ぎた若手ありで、随所に好プレーが見られました。また、現役対OB・OGの対抗戦では、観衆を唸らせ、拍手喝采の場面がしばしば見られました。関東地方の降水確率は高かったにもかかわらず、終日プレーすることができ、コートの内外で楽しい1日を過ごすことができました。

庭球は、体操伝習所で軽体操を教えながら用具を本国アメリカから取り寄せたJ・A・リーランド医学博士により、明治11（1878）年頃にもたらされたと『東京高等師範学校庭球沿革史』にあります。明治21（1888）年には、坪井玄道氏（1852～1922）の回りに集った数名の学生たちの具体的な名前が挙げられており、軟式庭球部は、この年を基点にして、1998年に100周年を祝い、その後10年ごとに記念行事を行ってきました。

東京高等師範学校の前身である東京師範学校は、昌平坂学問所が置かれた敷地に学舎を構えたとされており、現在の御茶ノ水駅前に流れる神田川辺りが茗渓庭球のルーツと思われます（『創立六十年』東京文理科大学編）。

坪井氏は、健康づくり、あるいは教育として普及させる上で、遊具のゴムまりに注目し、メーカーにゴムボールの開発を依頼したと考えられています。

私たちは、全国に散らばる先輩諸氏の地道な活動を支えにしながら、ルーツ校として、筑波大学体育会軟式庭球部をさらに発展させ、一方で中学・高校生たちへの普及活動を豊かなものにしようと考えています。

次の十年を充実したものにして、2018年には創部百三十周年を迎えたいと思います。

茗溪学園だより

個人課題研究発表会
筑波大学・大学会館で開催

今年1月、本校は創立30周年を迎えました。その創立記念日直前の1月22日、筑波大学・大学会館を会場に、筑波大学副学長の谷川彰英先生を始めとする8名の大学の先生方にご出席を賜り、本校高校1、2年生510名が参加して「個人課題研究発表会」を行いました。

本校では30年の節目にあたり、この個人課題研究にさらなる付加価値をつけたい。できれば筑波大学のさらるご支援をいただいて、大学との繋がりもより緊密にできないだろうかと考えていました。その思いが叶えられ、このような形で生徒達に発表の場を設けることができたことをたいへん嬉しく思います。私共の願いを叶えてくださいました谷川彰英先生、そしてそれぞれの分科会で座長をお務めくださいました7名の大学の先生方、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

「個人課題研究」とは

本校の教育プログラムの特徴の第一にあげられるもので、「17歳の卒論」とも言われている総合的学習に当たる科目です。

この研究活動は、創立以来、高校2年生に課してきました。将来の仕事に繋がるテーマで研究をしなさい、という指導のもとに進められていて、この研究の延長線上で現在の仕事に就いている卒業生も多勢います。昨年、宇宙への夢を実現させて話題となった宇宙飛行士の星出彰彦さんの場合、「スペースシャトルについて」というテーマだったことは本誌1058号で紹介した通りです。

この「個人課題研究」に、さらに付け加えたいと思い描いていたことが、すべての生徒に発表の経験をさせるということでした。プレゼンテーション能力を高める訓練の場を設けることで、このプログラムをさらに高いステージへと引き上げることができます。

43名が発表

大学の先生方のご援助をいただいて遂に実現した発表会ですが、発表数は43としました。テーマは、下表の通りです。この数は、生徒達に発表希望者を募り申し出のあった数です。大学会館内に、大ホールはじめ7つの会場を設け、7グループに分けて発表をしました。それぞれの会場には、大学の先生方が座長として出席してくださり、ご指導をいただくことができました。パワーポイントを駆使したプレゼンテーションは、どの生徒もはっきりとした言葉で発表され、内容的にも優れた研究であるとの評価をいただきました。

また、高校1年生は、7会場のうち、自分がテーマとしてやってみようと関心のあるところを選んで参加することになっていました。休憩時間にそれぞれの会場に移動をするのですが「この先輩のこの発表を聞きたいんです」とプログラムのページを指差して言っている姿が印象的でした。

さらなる前進のために

本研究では、研究テーマが多岐にわたり、生徒たちも意欲的により深く研究を進めています。学校内の教員だけでは十分な指導ができないため、それぞれの分野の先進的専門の先生を外部に求め、訪問するなどしてご指導をいただくことも数多くあります。指導をいただいた先生の大学に行きたいと、懸命に受験勉強して進学を果たす例もあります。

今後さらに、生徒達がより大きな力を身につけられるように進めてまいりたいと思います。そのためには、筑波大学との繋がりがより太くなり、一層のご協力をいただければと思うところです。今回に引き続きお力添え賜りますよう、この紙面をお借りして、あらためてお願い申し上げます。（校長　柴田　淳・52教体・56筑修体）

A会場　社会学関連分野
1　中国における四農問題
2　子育ての現状とこれからの子育て支援
3　ドイツと日本における３Ｒの現状と展望
B会場　法学関連分野
1　薬害Ｃ型肝炎
2　遺棄化学兵器チチハル事件裁判
3　御殿場少年事件からみる冤罪
4　途上国の子どもたちと権利条約
C会場　英文学・文学・経済学関連分野
1　チャーリーとチョコレート工場の翻訳
2　日本のNPOのバンクの現状と課題
3「ゼロ弾きゴーシュ」における動物を読む
4　平安女流文学における漢詩文の引用について
D会場　体育・芸術・福祉学関連分野
1　本の装丁
2　インド舞踊とフラメンコとの関りについて
3　ドーピング問題について
4　聴導犬とその訓練士について

E会場　医学関連分野
1　放射線治療においてIMRTが副作用をなくせる可能性
2　東洋医学　―瞑眩の治療と対処法―
3　アデノウイルスベクター、アデノ随伴ベクターを用いた遺伝子治療
4　心筋梗塞の薬の副作用
F会場　工学・生物学・獣医学・歯学関連分野
1　航空機の安全性について
2　200年住宅実現への企業の動きと実現方法
3　狂犬病の予防と対策
4　酵素について　―医療への応用―
5　冬眠の人への応用
6　インプラント治療分野における歯槽骨増大術
G会場　化学・環境学・心理学関連分野
1　有害化学物質のデトックスの仕組み
2　地球温暖化が極地の気候及び海洋環境に与える影響
3　親子関係　―すれ違いの解決策を立てる―
4　ダイオキシン類の人体への影響とその治療

以上、紙面の都合上、43のテーマのうち29テーマをご紹介しました。

本部だより

公益法人改革への対応

国の進めている新公益法人制度の施行により、昨年12月1日から全ての公益法人は、一旦、自動的に特例民法法人となり、平成二十五年十一月三十日までに新制度の法人を選択しなければなりません。社団法人茗渓会は、どのような形の同窓会として、どのような形の法人となるべきか、理事会で法人制度改革検討委員会を設けて検討しています。5月の通常総会では、委員会の中間報告ができる予定です。今後、各支部・会員の皆さまに検討の経過をお伝えしていきたいと思います。

大学支援のための助成金目録贈呈

茗渓会から大学への支援のために、去る2月17日、学長応接室において、茗渓会の西野理事長が岩崎学長へ助成金目録贈呈を行いました。茗渓会は母校・筑波大学の行事や学生活動および芸術賞関係で助成金を贈っていますが、今年度の芸術賞は本誌5ページ掲載のとおりです。なおこの日、筑波学都資金財団からの助成金目録贈呈も合わせて行いました。

筑波大学卒業式および学群別祝賀会

3月25日(水)大学会館講堂において、卒業式並びに大学院学位記授与式が行われました。茗渓会からも理事長ほか複数の理事が参列しました。

今年度の学群卒業生数は次のとおりです。

第一学群434、第二492、第三628、医学222、体育236、芸術124、図書館情報189、理療科教員21、計2346人。また大学院修了者は、修士373、博士前期1149、博士修了288他、計1922人。

卒業生から「連絡はがき」

筑波大学卒業式当日、茗渓会では筑波大学支部の先生方により、卒業生に入会勧誘と同窓生ネットワークづくりのための連絡はがきを配布しました。卒業生からはさっそく本部宛、新しい住所や進路先を記したはがきが届いており、春の息吹を感じさせます。

筑波事務所で教職受験対策相談窓口

筑波大学の大学会館内に茗渓会筑波事務所を開設して1年になりますが、この間、大学と連携して教職をめざす学生のために「教職受験対策相談」を行ってきました。昨年度は毎週定例火曜日に開きました。昨年1年間の相談件数は31件で、相談内容は、教員の資質、単位の取り方、必要な経験、採用試験対策など、多岐にわたっていました。

今年度相談に対応するのは引き続き次の二人です。

筑波研修センター所長　染谷　信洋（元茨城県高校長）
学生宿舎管理事務所長　髙野大二郎（元茨城県高校長）

相談の受付　筑波事務所担当・五木田まで
電話　029（850）1044
メール　kyousyoku@sec.tsukuba.ac.jp

相談室の場所
茗渓会筑波事務所（筑波大学大学会館内）

茗渓会の公開講座（予定のご案内）

日時　平成21年6月20日(土)　14時～15時30分
場所　東京・茗渓会館

文芸公演

平安朝の女性像から（仮題）
『源氏物語』(原文)の抜粋と堀辰雄『曠野』から
～作品の解説と朗読を通して探る
朗読と解説　幸田弘子氏

参加申し込み
茗渓会事務局　電話　03(3941)0136
FAX　03(3941)7674
eメール　info@meikei.or.jp

訂正　1060号に誤りがありましたので、訂正してお詫び申し上げます。

16頁　織田元泰　卒年　(正)36　(誤)26
21頁　町田正治ご遺族住所　(正)甲州市　(誤)甲府市

編集後記

・本号では、特集Ⅰとして、新たに国立大学法人　筑波大学長に四月一日に就任された山田信博氏より「魅力ある大学づくりを」という原稿をいただきましたので掲載いたしました。その中で、新学長は「次期中期目標及び計画の策定に際して」「めまぐるしい変化の中で」「茗渓会は同窓生の集う大事な拠点」「つくばダイヤモンドは」などについて述べておられます。また、理事、副学長の新執行部も発足しましたので、グラビアに写真を、本文に略歴等を掲載いたしました。
・特集Ⅱとしては「はばたく若者たち」として、昨年、本会主催の教職受験対策研修会に参加し、教員採用試験に合格して、この四月から教壇に立つ卒業生と、本会が授与する「茗渓会賞」を受賞した学生に将来の抱負や受賞の喜びなどを記してもらいました。

お願い

・正確な会員情報の把握のために、住所、勤務先(地)の変更はすぐにご連絡ください。
・年会費のお振込みは、早めにお願いいたします。

季刊誌「茗渓」は、茗渓会の公益事業の一環として刊行されている出版物です。

表紙題字　茗渓会前理事長　故　鵜川　昇　氏
表紙デザイン　筑波大学教授　西川　潔　氏

平成二十一年四月十五日発行
発行兼編集者　田中正造
発行所　112-0012　東京都文京区大塚一-五-二三
社団法人　茗渓会
E-mail info@meikei.or.jp
URL http://www.meikei.or.jp
TEL　〇三-三九四一-〇一三六
FAX　〇三-三九四一-七六七四
振替口座　〇〇一五〇-二-四九七七
印刷所　東京都文京区関口一-三九-一〇
山浦印刷株式会社